

LE CORBUSIER

DESTIN DE PARIS

パリの運命

ル・コルビュジェ

林要次・
松本晴子 訳

★ 目 次

パリの運命 5

訳者解説 63

訳者あとがき 88

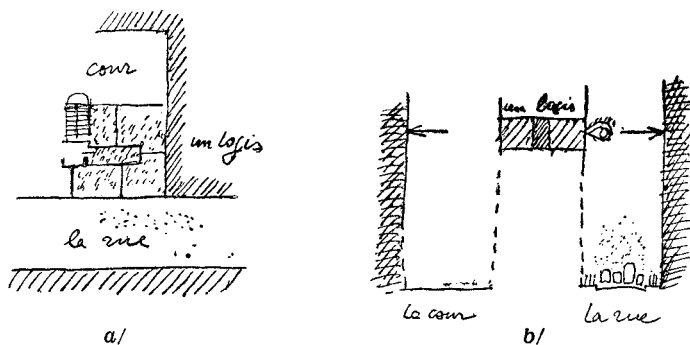


図1 旧来のすまい。a) 平面 b) 断面

解釈：

12%はピロティ部分の屋根つき運動場。

88%は散歩とスポーツのための公園。

12%は屋上の《人工》地盤。

歩行者は全体で112%の土地を活用できる。

10. 自動車は地上5mにある鉄筋コンクリートの高速道路の専用道路網を利用する。

自動車はドア・トゥ・ドアで走る。建物は道の縁取りではもはやなくなる。道はもはやない。歩行者は自動車に出会うこともない。

(メモ——上述の点はこの冊子では詳述できない。これは『^{ラ・ヴィル・ラディーズ}輝く都市』³⁾と題したユルバニスム論文の骨子であり、

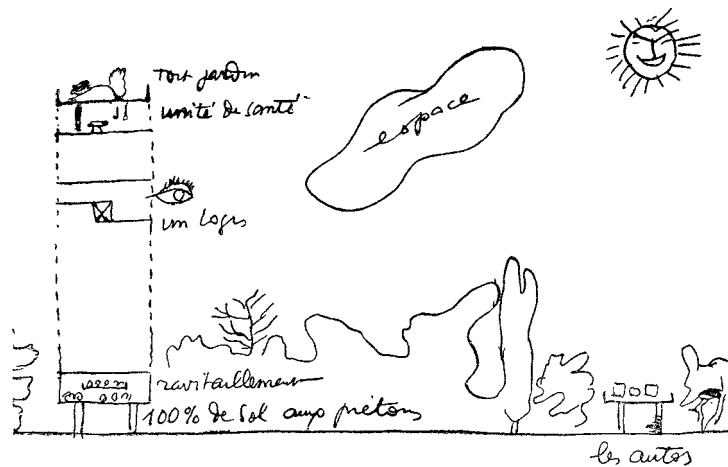


図2 新しいすまい。《輝く都市》タイプ。

この明快な文献が上記の点について詳述している。)

すまいを構成する基本単位の外にある延長部分が、こうして浮き彫りとなる。

3) 『Plans(プラン)』誌、1930～31年の各号参照。特に『La Ville radieuse(輝く都市)』(1935)参照。またC.I.A.M.第3回ブリュセル大会(1931)、第4回アテネ大会(1933)、第5回パリ大会(1937)での成果を参照。

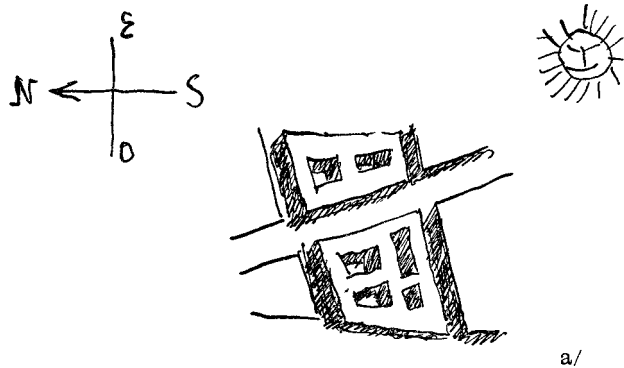


図3-a) 旧来の分譲地：解析によれば部屋の半分（もしくはそれ以上）は太陽光が入らない。

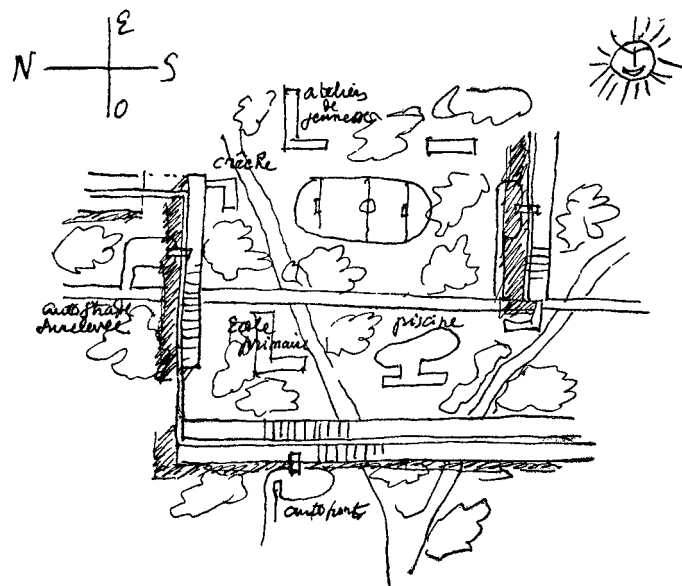


図3-b) 新しいすまい。《輝く都市》タイプ。各すまいは太陽光をとり入れ、北むきのすまいはつくらない。すまいの延長は、託児所、幼稚園、小学校、青少年のアトリエ、足元のスポーツ施設、歩行者から分離された自動車。

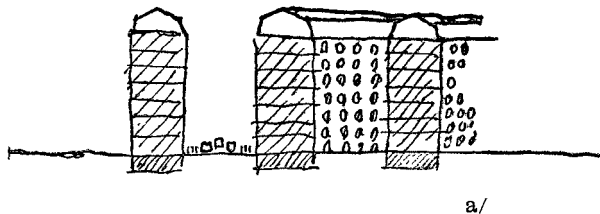


図4-a) 1haあたりの居住者数250～300人という通常の人口密度。旧来の手法。

★★

これまでになしとげられた建築的革命によって近代都市の開発に着手できる。そのメカニズムをいくつかの図版と数値で明らかにしよう(図4)。

すでにルイ十四世治下において住居建設は旧来の技術(石、レンガ、木の壁、木や鉄の床)により6層に制限されていた。のちにパリの役所は利用方法、通りの幅員、日照、美観など複合的な理由でコーニスの高さを20m、棟木を平均30～35mにする規則を定め、この高さを維持してきた。居住地区の横断面が特徴的だ(図4-a)。

様々な可能性を秘めた新たな配置の断面に注釈は必要ない(図4-b)。

すまいの新たなルールの採用という率先的な行動の結節

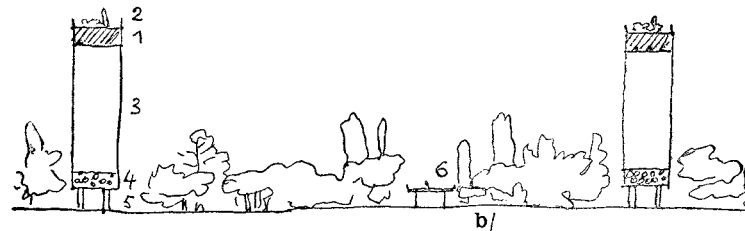


図4-b) 現代的手法。《輝く都市》タイプの人口密度:1haあたり1,000人の居住者。

1. ユニテ・ド・サンテ 2. 日光浴場、水治場 3. すまい 4. 生活必需品 5. 屋根つき運動場 6. 高速道路

点にあるのは、1haあたりの人口密度の数値と質の驚くべき改善である。

伝統的な断面をもつ建物の1haあたりの居住者数は、ゆったりとした地区では250～350人、不良家屋(不衛生街区)では600～800人という数値に至る。

《輝く都市》タイプの新たな断面では1haあたりの居住者数が1,000人ながら、最適な条件下にあるすまいが提供される(上述通り)(図4-b)。

実際、これは都市部の土地の大幅な価値回復にかかわってくる。この価値づけは——ひとたび実例が示されれば——所有者(所有者組合)再編の法制に支えられ、実り豊かなユルバニズムの構想に従って、民間の率先的な行動を自然に誘発するだろう。

*La Grande Traversée
Est-Ouest
à Paris*

図16 人口約18,000人を
対象とする《輝く都市》タ
イプの居住地にうまれかわ
った《第6不衛生街区》。

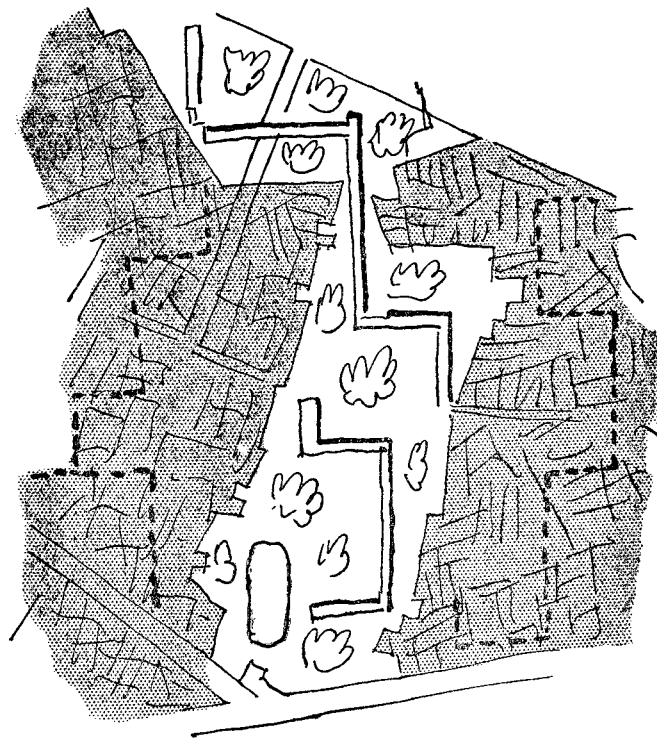
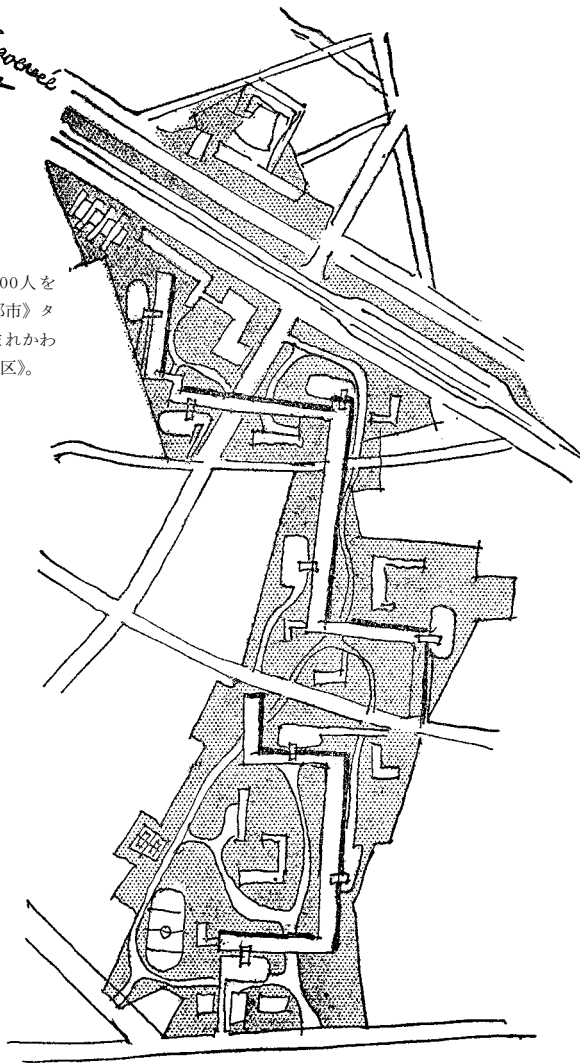
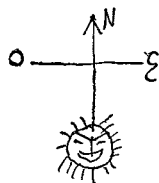


図17 第6街区(中央)と隣接する境界の目を見張る対比。第6街区には空間が広がり、隣接する境界はシロアリの巣が広がっているようだ。第6街区は太陽と公園が大きく占め、隣接する境界は病氣と失望につつまれる。黙ってはいられないなんという対比だ!

パリの中に延びゆく線によって私たちの提案は伝統の連鎖そのものに組みこまれる。それをこれらの図表(図19-b)が示している。

★★

来たるべき帰結

ここで航空戦について少し触れることは場違いではないだろう。

「数年来、ベタン元帥の参謀であり空からの脅威に関する調査責任者であるヴォーティエ将軍が、ユルバニストとして人類史上の新たな戦争の切迫する脅威について数学的推論を行う。」⁷⁾

これは1937年C.I.A.M.第5回パリ大会の声明書に記された内容だ——彼は会議参加者たちの前で黒板を使ってこのテーマを説明した。

「空からの脅威、それは新種の脅威であり、建築とユルバニズムの新たな問題の解決策に疑問の余地なく影響を及ぼす。その結果が都市再開発事業にあらわれるだろう。」

「空からの攻撃は3つの危険をとまなう。すなわち火災、爆撃、有毒ガス。この3つの視点からユルバニズムと建築を研究することが重要だ。」

7) 1937年C.I.A.M.第5回パリ大会の書籍『Logis et Loisirs (すまいと余暇)』。

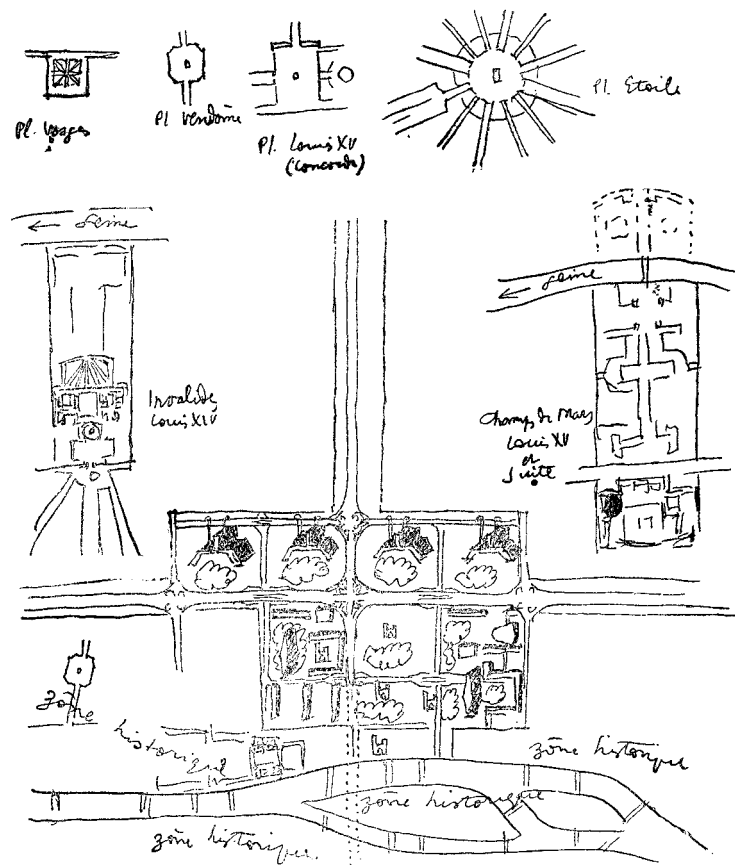


図20 数世紀の間に豊かに発達したすべて同じ縮尺のユルバニズムの構成。行政都市《パリ計画37》において公園の中央に大きな建物群が集まっている(小さな彫像が教会のファサードを図式化し、以前はその来歴にふさわしい配置がなされず道端に打ち捨てられていた歴史的な教会や宮殿が公園の真真中にあらわれるよう周囲の配置を整理した)。

訳者あとがき

都市の危機的な状況に際し、建築家や都市の計画者たちはどのように振る舞うのか。日本人初のボザール建築家中村順平は関東大震災後にパリ留学から帰国し、『パリの運命』と同様の体裁の小冊子『東京の都市計画を如何にすべき乎』(1924)を自費出版した。中村はこの冊子でル・コルビュジエの《300万人の現代都市》を紹介し、自身による東京の震災復興の提言を行った。訳者が初めて『パリの運命』を手にしたとき中村の冊子を思い浮かべていた。

1937年《新時代館》の展示のあとにパリに関する都市的規模の提案のなかったル・コルビュジエがナチス・ドイツ占領下のパリの行く末をいかに案じ、パリの地図上にどのような《輝く都市》を描こうとしたのか。

そんな興味から『パリの運命』の翻訳が2年前に始まった。その矢先に東日本大震災が発生した。都市の危機的状況に対し、現代の建築家や都市の計画者の振る舞い方に直面し、戦後の平和な時代に忘れられていた『パリの運命』に再び光をともし歴史的意味合いが感じられた。

『パリの運命』は戦間期から戦中にかけてのル・コルビュジエをとり巻く環境や人間模様、そして当時の危機的な状況を明らかにする。解説に登場する人物はそれぞれ著作を残している。

戦前戦後のル・コルビュジエの著書に描写される《輝く都市》には微妙な違いがある。『パリの運命』の2年後に出版されたロベール・オーゼルらによるアンソロジー『Destinée de Paris』(1943、末邦訳)はル・コルビュジエとは異なる視点でパリへの想

いを描いている。またアンリ・ルフェーブル『都市への権利』(原著1968、森本和夫訳、筑摩書房、2011)は《輝く都市》を批判的に論じたが、このあたりの詳細は別の機会に譲る。

翻訳作業では、ル・コルビュジエ自身の書籍レイアウトのこだわりに敬意を表し、その全体像を壊さないよう可能な限り原著レイアウトを踏襲した。松本晴子が訳文のベースを作成し、その下訳をもとに林要次が建築・都市関連の用語、既往翻訳本との訳語比較、全体のとりまとめを行った。最終的に両名で文意の調整、文体の統一等を行った。

最後に、これまでル・コルビュジエの著書を翻訳された諸先輩方の偉業への感謝とともに、パリ留学時代の恩師でル・コルビュジエ財団前事務局長のクロード・ブレロレンツォ氏にはこの場を借りて改めて御礼申し上げたい。さらにル・コルビュジエ本人はもとより、ル・コルビュジエ財団関係者、諸先生方、友人や家族、さらに突然の翻訳企画提案に対しこの機会を与えてくださった彰国社編集部前田智成さんにこの場を借りて心より感謝を申し上げたい。

そして何よりもパリでの予期せぬ多忙な生活の中で翻訳作業が滞りがちであった中、力強く支えてくれたのは共訳者であり妻である松本晴子だ。最愛の妻に最大の感謝をこめて。

パリにて、2012年6月29日

林 要次